

# Moodle による文化圏調査と分析

## The Cultural Sphere Investigation by Moodle and its Analysis

平澤洋一\* 松永公廣\*\* 橋本恵子\*\*\*

\*HIRASAWA Yoichi \*\*MATSUNAGA Kimihiro \*\*\*HASHIMOTO Keiko

\*城西大学 \*\*名古屋学院大学 \*\*\*福岡工業大学短期大学部

\*Josai University \*\*Nagoya Gakuin University \*\*\*Fukuoka Institute of Technology, Junior college

### 要旨

日本地図の上に各地方言の音韻・文法・語彙や民俗・人間行動などの実態を分布させた日本言語地図はないしは地域方言分布図の類は数多いが、日本文化地図化管見に入らない。本研究は、日本文化の深層をベースに言語文化史的な見地から文献資料・実態調査資料を積み上げることで、日本文化地図を作成することを目的とする。本発表では日本文化深層の上に現代の文化圏がどのように分布しているのか、若年層を対象にした Web 調査結果の一部を報告したい。

### 1 はじめに

日本の言語地理学は音韻・文法・語彙・民俗行事・人間行動などに関する詳細な調査結果を日本地図の上に描くことで、方言区画・新旧・伝播方向などを明らかにし、日本語研究に多くの貢献をなしてきた。これらの地図の中には、衣食住や習俗のように文化に関するものも散在するが、文化の地図としては断片的である。文化言語学が説くように、文化は言語に映されているので、言語を手がかりに日本全域の文化を調査し、それを日本地図の上に分布させることを続けつつある。

本稿では、日本文化の深層の上に積み上げられてきた文化言語史的視点に立った現代文化圏の実態調査と結果の一部を扱うものとする。

### 2 深層から現代の姿へ

日本文化の深層については、次の4段階を経てできあがったのではないかとすでに論述した<sup>(1)</sup>ことがある。

第Ⅰ期日本文化圏：(1) 上古アイヌ文化圏・北海道縄文人文化圏、(2) 縄文宮古諸島・先島諸島文化圏。

第Ⅱ期日本文化圏：(3) 粟地帯としての関東縄文文化圏を中心とする縄文関東・東日本文化圏、(4) 佐渡島文化圏、奄美大島・沖縄本島文化圏。

第Ⅲ期日本文化圏：(5) 麦・粟地帯としての隼人文化圏（九州北部および隠岐・雲伯を中心とする中国地方北部文化圏）。

第Ⅳ期日本文化圏：(7) 稲地帯としての近畿および瀬戸内を中心とする弥生文化圏、(8) 八丈島文化圏。

これら文化圏の分布は甲元真之・山崎純男(1984)の粟・麦・稲の分布図に重ねて作成したの

が図1である。日本文化圏が東アジア大陸文化圏とのつながりを有して分布していることが分かる。

独立行政法人理化学研究所は、1人あたり約14万個所のDNA塩基多型を用いて日本人の集団構造

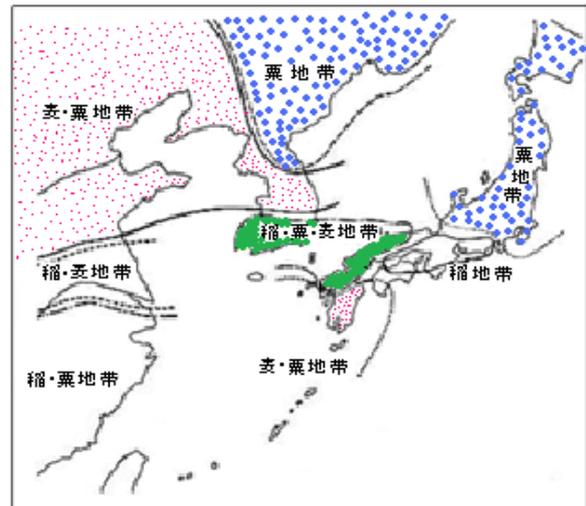


図1 粟・麦・稲の文化圏

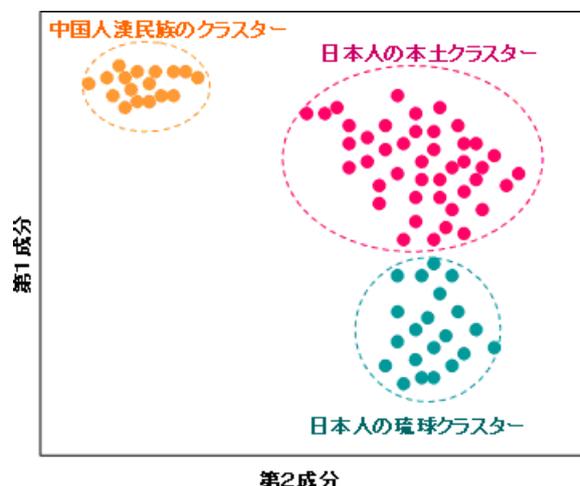


図2 日本人の2大クラスター

を7,000人以上の日本人の常染色体上のDNA塩基多型情報を解析し、ほとんどの日本人は「本土」と「琉球」の2クラスターに大別され(図2),本土でも遺伝的には「北海道」「東北」「関東甲信越」「近畿」「東海北陸」「九州」の6クラスターも遺伝的な地域差があること<sup>(2)</sup>を明らかにした。この事実と図1は基本的には符合する。

### 3 若年層 Web 調査

図3は日本の方言区画であるが、この図も図1・図2の文化圏分布とほぼ重なっている。



図3 日本の方言区画(平山1968)

現代日本の文化圏がどのような分布をしているのであろうか。それを明らかにするための第1段階として、Moodleで作成したWeb上の日本文化圏調査で若年層を調査した。その調査結果の一部を図4に示したが、若年層文化にも東西の境界線のあることが分かる。

調査および分析が現在も進行中につき、全国大



図4 若年層文化圏の一部

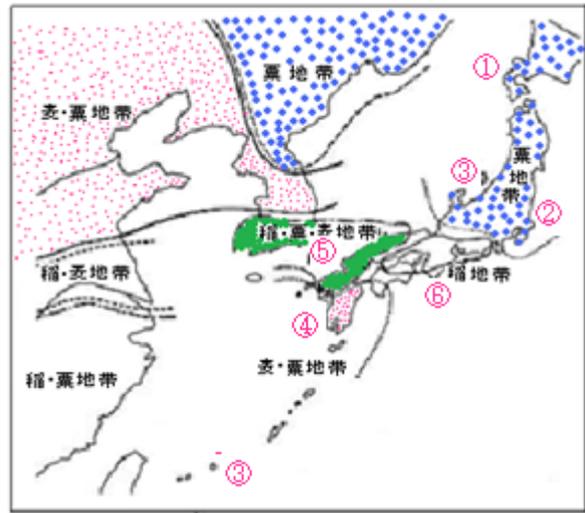


図5 日本文化圏の生育

会の発表時には若年層調査の分析結果全体をご報告する予定である。

### 4 おわりに

第2節で見た第I期～第IV期の文化圏の生育の詳細データを図1に重ねて作成すると図5を得る。①～⑥は文化圏生育の順番を表す。同じ番号は、同時代に現れた文化圏を示す。①のほか移動は北海道全域ではなく、縄文時代の道南のアイヌ文化圏から稚内に至る移動生活文化圏である。米文化の近畿文化圏が最も新しい文化圏である。詳細は稿を改めて論じる。老年層については第III期文化圏調査において可能な限り臨地調査を行いたいと計画している。

### 注

- (1) 平澤洋一・松永公廣・鄭淑源(2010)『情報文化学会誌』18巻1号
- (2) <http://blog.kodai-bunmei.net/blog/2009/02/000711.html>

### 参考文献

- [1] 甲元真之・山崎純男(1984)『弥生時代の知識』東京美術。
- [2] 平山輝男(1968)『日本の方言』講談社、同(1992)『現代日本語方言大辞典』明治書院。